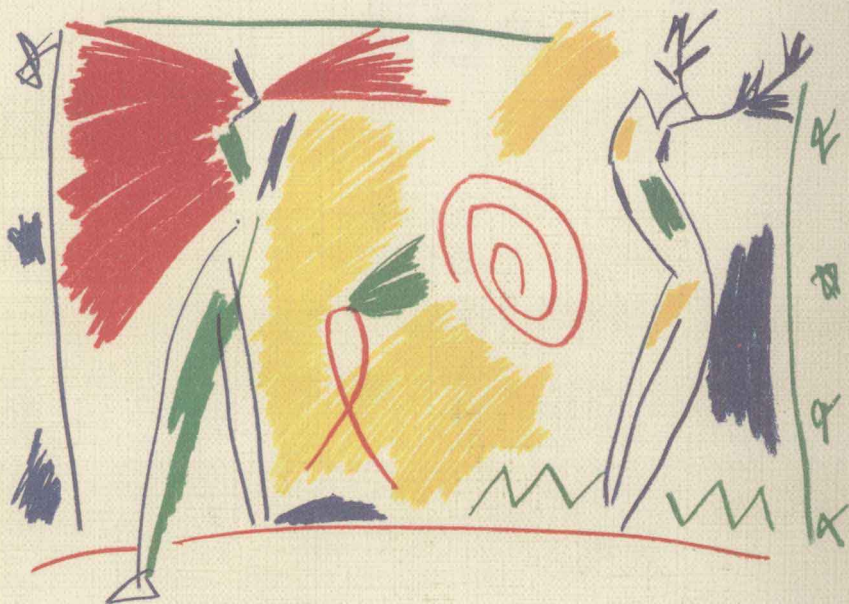


何処へ

いずこ

渡辺淳一





何処へ

いずこ

渡辺淳一

新潮社

何処へ いずこへ

著者

渡辺淳一 わたなべじゅんいち



発行

一九九二年二月一日

発行者

佐藤亮一

発行所

郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話

営業〇三(3266)五一一一 編集〇三(3266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所

二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示しております。

花	轉	木	混	乱	揺	愁	上	
曇	回	枯	沌	調	影	日	京	目次
409	375	319	249	141	101	51	5	

装画・黒田アキ

何^い
^ず
処^こ
へ

上 京

一

昼過ぎからはじまった引越し家具の収納がひとまず終り、部屋が住めるようになったのは五時を少し過ぎていた。四月も末になって日足も大分長くなったのか、奥の部屋のペランダからの斜光が、畳に敷いたカーペットの端まで延びている。

部屋は二DKで、入口を入ってすぐ六畳の洋間とキッチンがあり、その先に襖ふすまの仕切りをはさんで八畳の和室が並んでいる。裕子はその洋間に辛うじておさまったソファに坐り、買ってきたばかりの葉や罐かんから急須に湯を注いでお茶を淹ひたれてくれる。

相木悠介あいきゆうすけはそのお茶を飲みかけて、ふと手をとめた。

「どうしたの？」

裕子はお茶にごみでも入っているのかと思ったようだが、悠介はそのままお茶を飲んだ。

やや濃いめの煎茶せんちやである。

それを味わいながら、悠介はいま頭のなかを通りすぎた思いを振り返る。

一瞬、なにか胸の底からこみあげるような感慨であったが、といって喜びに胸が震えるといった感じでもない。強いていえば、ようやくここまでたどりついたという溜息とでもいおうか、よくやったという自分の行為への満足とともに、ついにこんなところにまできてしまったという軽い悔いもまじっている。安堵と不安と、少し自分に呆れた氣持が入りまじって、一瞬、茶碗を持った手が止ったのである。

いずれにせよ、悠介自身がうまく説明できないのだから、裕子にわかるわけではない。

もともと裕子はこの種の曖昧な氣持の揺れに理解のあるほうではない。細面のおっとりした顔立ちに比べて、性格はさばさばしていて行動も明快である。

三カ月前、悠介が札幌の勤め先を辞めて東京へ行くつもりだと告げたときも、裕子は簡単に納得した。

「いいわ、面白いんじゃない」

悠介のまわりにいる家族はもとより、友人達まで反対しているのに、裕子だけはあつさりと賛成し、そのあまりの呆氣なさに悠介はかえって氣勢を殺がれたような氣持になった。

「一緒に行ってくれる？」

悠介が誘ったときも、裕子はあまり動じる氣配はなかった。

「あなた、一人で行くんでしょう」

「もちろん、家族はおいていく」

三十五歳の悠介には、妻と娘が二人いるが、それらを札幌に残したまま行くと知って、裕子は安心したようである。

「二人で棲めるのなら、行ってもいいわ」

裕子が自分に好意を抱いていることはわかってはいたが、それにしてもこれほどあっさりとうなずくとは思っていなかった。

悠介が一年間、考えた末に決断したことを、いとも簡単に受け入れる。

一見、女はぐずぐずしているようにみえるが、それは買物や着るものの選択などの場合で、人生の大きな岐れ路などでは意外に大胆に決断する。もちろんそれまでには深刻に悩むのだろうが、一度決めると、もはや振り返りはしない。これに比べると男は買物のようなものは簡単に決めるが、仕事や生き方に関わることについてはなかなか決断がつかず一度決めてからもまた迷いだす。とくに悠介の場合、十年間勤めてきた大病院の医師という職業を捨てなければならなかった。それも三十五歳で講師という比較的恵まれた地位についていただけに未練もあった。

いったい、そんな立場を捨ててまで東京へ出て行く価値があるのだろうか。小説を書くだけなら、札幌で医師の仕事のかたわらでもできるのではないか。

家族をはじめ、先輩から友人達にまでいわれて、悠介はさらに迷った。

そんなとき、裕子のあっさりした返事は、百万の味方を得たような頼もしさだった。

「このところ、いろいろ書いて、大学にもいづらくなつたしね」

半年前の昭和四十三年八月、悠介の大学で日本で最初の心臓移植がおこなわれたが、その手術の是非をめぐる論争が起きていた。

悠介は同じ学内にいる者として調べた結果、好ましくない手術と断じて、批判的な文章を発表したが、それ以来、一部の医師達の反撥を招き、気まずい雰囲気になっていった。むろん学内にも今回の手術に対して批判的な人はいたが、陰口として批判するのと、文章で公に発表するのとで

は大分事情が異なるようである。そのあたりを見抜けなかった悠介の若さは問題だが、それにしても、大学というところは住み難いところである。

考えるうちに、悠介は大学にいること自体が鬱陶しくなってきた。

このまま謝って大人しくすればいいわけではないが、いつそこの機会に東京へ出てしまおうか。迷いながら、悠介はきいてみた。

「いま三十五歳だろう。ここで東京に出なければ、もうチャンスはないような気がするんだ」

悠介が医師のかたわら小説を書きはじめて、すでに四年経っていた。その間、中央の有力な文学賞の候補に二度ほど挙げられたが、いま一つ力およばず、落選の憂き目にあっていた。

ここから一步抜け出すには、東京のような刺戟の多いところへ出て、本格的に取り組んだほうがいいかもしれない。

「でも、東京に行つて小説を書くだけで、生活できるの？」

暢んびりしているようで、裕子は鋭いところを突いてくる。

正直いって、悠介もそこがもつとも気がかりなところであつた。

「生活していくくらいなら、なんとかなると思うけど……」

すでに中央の出版社からときどき原稿の依頼はあつたが、毎月、決つてあるというわけではない。それに原稿を書いても必ず載るという保証もなかった。ときに掲載が延期になったりボツになったり、たちまち収入が途絶えてしまう。

「しばらく、医者のアルバイトをやってみようと思うんだ」

「そんなのが、あるの」

裕子は笑つたが、悠介はそれで生活費くらいは稼げると思っていた。

もつとも、アルバイトといつても毎日勤めるのでは東京に出てきた意味がない。

「一日おきか、週に二回くらい勤めようかと思つてね」

初め、悠介はそんなふうに考えていたが、それは少し甘かったようである。

大学を捨てて上京する前、一度東京へきたついでにお茶の水の医師会館へ行き、医師の求人欄を探してみた。だがいずれも全日勤務が原則で、週に二、三日だけ、というのはほとんどない。たまに見付かつて内科系で、外科系では皆無に等しい。

考えてみるとそれは当然で、外科の場合は手術があるので、月曜日に手術をしたとして、そのあと火・水と二日休んで三日後の木曜にくるのでは、手術された患者は不安である。これでは「切りっ放し」といわれても仕方がない。

悠介は専門が整形外科なので、全日制の求人しか見当らない。

仕方なく、外科医を求めている病院に片っ端から電話をかけ、どうしても一日おきに勤めたい旨を説明して、ようやく両国の近くにある山根病院というところが了解してくれた。

翌日、悠介が地図を頼りに行ってみると中規模の病院で、外科の院長の他に内科医と外科医が一人ずついるが、院長は政治家を目指していて、医師のほうはあまりやる気がなく、その穴埋めにといいことらしい。

給料は日給制であり高くはないが、病院の裏手に院長の経営しているアパートがあり、その二DKの部屋を無料で貸してくれるという。これなら原稿が売れなくても、なんとかやっていけそうである。悠介は早速勤めることにしたが、胸の底につかえるものがある。

「ついに、開業医に勤めることになってしまった……」

医師の場合、勤め先によってある漠然としたランクがあつて、最も権威があるのが大学病院で、

次いで一流の官公立病院、続いて小さな公立病院、そして開業医院ということになる。もっとも収入のほうは、この逆になる場合が多い。

悠介のように大学病院のスタッフだった者が開業医に勤めるのは、ずいぶん身を持ちくずした感じになるが、裕子にそんな気持がわかるわけもない。

「よかったじゃない、部屋が見付かつて。東京は部屋代が高いから」

「そこに一日おきにも行けば、二人だけの生活はなんとかやっていけるよ」

「でも、奥さんに仕送りしなければならぬでしょう」

裕子は意外に優しいところがあつて、悠介の妻のことまで心配してくれる。

「^{うち}実家のほうは、当分、退職金もあるから大丈夫だよ」

妻子は実家に預けてきたし、退職のときに得たお金も渡してきたので、当分、生活に困ることはないはずである。

「東京に行ったら、わたしも働くわ」

「また、バンケットクラブをはじめめるのか」

「それは無理だけど、働く気になればいろいろあるでしょう」

もともと裕子は宴会やパーティにホステスを派遣するバンケットクラブを経営しながら、自らもそのメンバーとして働いていた。

悠介が裕子をはじめて知ったのも、二年前、定山溪温泉で開いた大学卒業十周年パーティの席で、バンケットターとして出てきたからである。

そのとき裕子は和服を着ていたが、その姿のよさと軽い受け口がなま艶めかしい。

同期ばかり五十人ほど集まった酒席に、十数人のバンケットターがきていたが、裕子が酒を注い

でくれたとき、悠介は冗談めかして、「接吻せつふんをしたいような唇くちびるをしているね」といった。

裕子は笑って受け流したが、酒席が賑やかになったところで、突然、部屋の明かりが消され、ポルノ映画がはじまった。

幹事が苦勞して集めてきたらしく、ボカシのない、いわゆる正真正銘のポルノで、みんなが息をひそめて見ているとき、悠介がつぶやいたらしい。

「こんなものくだらないよ、俺は見る気はしないんだ」

つぶやいたらしい、というのは、そのとき悠介はそんなことをいったことは忘れていて、あとで裕子に教えられたからである。

正直いって、悠介はそれまで何本かのポルノを見ていたので、その同工異曲さにいささか飽いていた。それに同期全員が水を打ったように静かになってポルノを見ている姿が気持ち悪くて、強がり半分にいったのだが、結果として、その一言が効いたらしい。

「みんながポルノを見ているときに、あなた一人だけ横を向いてお酒を飲んで、あのときは恰好よかったわ」

のちに悠介に惚れた理由を、裕子はそんなふうにいって、まさか、「わたしの気を惹ひくために、やったんじゃないでしょうね」とたしかめた。

もちろん、悠介にそんな下心があつたわけではない。裕子を気に入ってはいたが、そんなことで裕子がなびくとも思っていなかった。それに、「くだらない」といったのは、それ以前に何本ものポルノを見ていたからで、その意味では、真剣に見詰めていた仲間のほうが純情だったともいえる。いずれにせよ、その会がきっかけで悠介は裕子と会うようになり、三カ月もせずに二人は結ばれた。

まことにそこまでは順調というか、うまくすすんだが、裕子には他に際き合っている男性がいた。さほど資金のかららないバンケットクラブとはいえ、裕子が二十代の若さで経営者になっていることが不思議だったが、その男が裕子に資金の援助をしていたのである。

裕子はあつさり認めて、「でも、いまはあまりうまくいっていないの」というが、はたして男は簡単に裕子を手放してくれるのか、水商売に金を出しているのだから、暴力団と近いかもしれない、下手するとトラブルに巻き込まれるかもしれない。

悠介は不安だったが、といって裕子を諦める気にもなれず、際き合っていた。

悠介が東京へ行こうと決めた最大の理由は、手術を批判して大学病院にいづらくなったためだが、同時にそれをきっかけに作家一本でやってみようと思つたからであり、さらには裕子と一緒に逃げることにへの憧れもなかつたとはいきれない。人生のなかでなにか一つ、だいそれたことをしてみたい、そんな冒険心があつたことも否めない。

先程、奥の八畳のカーペットの端まで届いていた斜光はさらに延びて、机の足下まで達している。悠介はその光りの筋を見ながらつぶやく。

「ついに、来てしまった……」

かなり深刻なつもりだったが、裕子はかすかに笑う。

「なにがおかしい?」

「だって、こんなところに二人でいるから」

たしかについ一カ月前までは、東京で裕子と二人で生活することなど考えてもいなかった。だがいま二人は間違いなく互いに寄り添つてお茶を飲んでいる。ソファやサイドボードなどは

裕子の部屋から運んできたもので、奥の和室にある机と椅子は悠介のものである。二人がそれぞれに持ってきたものがまじり合つて、一つの部屋に納まっているのも奇妙な風景である。

「でも、なんとか落着いたわね」

まだ洋簞笥ようだんすや押入れの前には整理しきれぬ衣類が散らばっているが、大きな家具類だけは一応納まったようである。

「もう少し、お茶を飲む？」

「ああ……」

うなずきながら、悠介はまた、満足と後悔と安堵と不安のいりまじった複雑な気持ちにとらわれた。

夜、悠介は裕子と連れ立って食事に出かけた。

新しい家で夕食をつくれぬわけではないが、引越し早々でまだ部屋が落着かないし、食器や調味料などもすべて揃っているわけではない。それに裕子も少し疲れているようである。

外で食事といつても、まだ来たばかりでどこに行けばいいのかわからない。

結局、二人でぶらぶら電車通りを両国の方へ向かつて歩き、途中、「奴鮎やつこずし」という暖簾のれんのかかった鮎屋に入る。

「へい、いらっしゃい」

威勢のいい声に悠介は一瞬、気おされて立止るが、裕子に背中をおされて入口の近くに空いていた椅子席に坐る。

「カウンターも空いてるわよ」

「まず、ここでいいだろう」

東京で鮓屋に入るのは初めてだけに、いきなりカウンターには坐りにくい。

悠介は特上のにぎりを二人前とビールをもらい、まず乾盃する。

「じゃあ……」

こういう場合、なんというべきか。二人で東京へ出てきて「お目出度う」というにはまだ心にひっかかるものがあるし、「頑張ろう」というほど単純なものでもない。

悠介が戸惑っていると、裕子がグラスをがちりと合わせていう。

「お疲れさま」

たしかにその台詞なら間違いない。引越しのあと片付けで二人はいささか疲れている。

鮓の酢漬けのつまみがでて、それを肴にビールを飲んでみると、鮓が運ばれてくる。

鮓や平目、鮑などは北海道と同じだが、鯛や少し黄色味を帯びた鳥貝などは珍しい。かわりに向こうでは必ず入っている北寄貝や鮭などは見当らない。

「どう……」

「うん、まあまあね」

裕子はいささか、悠介は少し首をひねる。たしかにとろや鯛などは味が濃い、鳥貝は淡泊にすぎるし、烏賊は身が厚すぎて歯ごたえが悪い。

「これは、北海道のと違うだろう」

「もんごう烏賊とかいうのでしょうか」

「これも、向こうでいうと筋子だね」

イクラは赤味が強い、えに塩味が強すぎるし、海胆もさばさばしていて、こってりしたまるみ